変わらないもの

筒　井　友　弥

1995 年，本学ドイツ語学科に入学して最初の会話の授業．美しく聡明な外国人女性がクラスに入って来るや，教壇前の席に陣取っていた私の角刈り頭を撫でた.「気持ちいいな」．飾らず，どこか無邪気ささえうかがわせる笑みで，その女性は私をからかってみせた.これが,西本アンゲリカ先生と私のファーストコンタクトである．なんて綺麗で，愛らしい先生なんだろう．これからこの先生のもとで授業を受けられるとは，なんて幸せなんだろう．女性の年齢に言及することはタブーであると承知だが，後に，西本先生が，私の恩師である橋本政義先生の先生であったことを知ったとき，その外見と実年齢の差に驚いたことはもちろん，何より，さらに若かりし西本先生に教わっていた橋本先生に，思わず嫉妬心さえ抱いてしまった記憶がある．授業では，いつも先生は優しかった．同時に，私を何度もからかった.「寝不足ね．遊びすぎなんやないの？」.「この問題わからないの？ あなたもっと恋しなさいよ」.「なんかいいことあったの？ 顔がにやけてんにゃ」．温かい癖のある先生独特の日本語が，授業の始まる前，授業中，授業後に私の心を和ませた．昔から，学生のなかには西本先生を怖いと評する者もいるようだが，確かに，非常に厳しい先生であることは違いなく，私も何度も叱られた記憶があるものの，しかし私は，西本先生ほど学生側の立場で指導される教育者はおられないと思っている.そのことは，2009 年以降，私が本学に奉職して後，特に気づかされることになる．

例えば会議で.あまり成績の好ましくない学生の対応について検討するときなど，誰よりも先に，当該学生の将来を慮る「望み」を熱弁されるのは西本先生である．たとえ小さなやる気でも,それを少しでも大きなやる気へと伸ばしてやろうとする，それこそが自分たち教員の役目であると.「わからない」と言うのであれば，わかるまで何度でも根気強く教える．これができないのなら，そもそも教員である資格すらないと．そうして先生は，40 年もの月日を教育に費やしてこられた．

例えばナショナル・ウィークで．ナショナル・ウィークとは，2 年前より実施さ

れている本学特有のイベントだが，その際のドイツ・ウィークの一環として，学生たちにケーキを振舞うという企画が持ち上がったとき，学生が喜ぶならと率先して手作りケーキを準備してくださったのも西本先生である．普段はなかなか味わえないドイツのケーキを，先生独自のレシピとプロ顔負けの技術で焼いてくださり，決して元値など取れるはずもない破格の値段で販売することとなった．販売開始とともに，長蛇の列が大学の中庭を占領し，ものの一瞬で全てのケーキが売り切れてしまったことは言うまでもない．ケーキを美味しそうに頬張る学生たちの笑顔を，先生は，まるで我が子を見るかのような優しい微笑で見守っておられた．

奉職後 1 年が過ぎた頃，私は，毎朝のセットが億劫で思い切って頭を丸刈りにした．会議でお会いするや，先生は何を置いてもまず私の坊主頭を撫でながら，あのときと全く変わらない屈託なき笑顔で,「気持ちいいな」とおっしゃった．たとえどれほどの時が流れようと,「変わらないもの」がそこにあり，たとえ先生が教壇をおりられるとしても，私は生涯，西本先生の教え子の一人であることを心から幸せに思う．